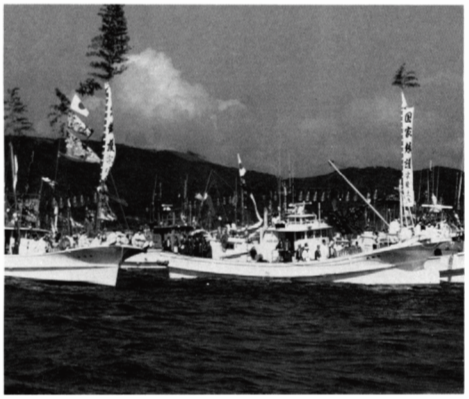
宗像
毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像社会
〒811-35　福岡県宗像郡玄海町
電話　0940－62－1311(代)
定価　一年送料共　1000円

神具・装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
福岡店　福岡市博多区東公園二－三一（〒812）
電話　福岡(092)六五一－九四五六番
本店　京都市下京区油小路六条北入（〒600）
電話　京都(075)四一三一(代)－四番
三四三一－三三四一番

神郡宗像に秋を告げる
みあれ祭斎行



神郡宗像に秋の到来を告げる宗像大社、秋季大祭が十月一日から三日に亘り盛大裡に斎行された。この神事は玄界灘洋上に鎮座される沖津宮、中津宮の御神鑒と辺津宮合わせて三宮の御神鑒が一年に一度、辺津宮に集われて執り行われる一大神事である。

みあれ祭に先立ち、去る九月十日に玄界灘の孤島に鎮座する沖津宮の御神鑒を大島中津宮まで御迎えする沖津宮神迎え神事が、大島「伸洋丸」（船長宮本昭男氏）御座船奉仕のもと厳粛に斎行され、大祭前日迄、中津宮本殿に奉安された。

明けて十月一日早朝、中津宮出御祭を斎行。沖津宮、中津宮の御神鑒を奉安した御輿は、海洋神事奉賛会の青年達により担がれ、大島小学校鼓笛隊の先導で中央埠頭へと御神幸、沖津宮御座船金光丸（鐘崎北野一廣氏）、中津宮御座船第八宮地丸（大島宮本一郎氏）にそれぞれ奉安され、大祭の初頭を飾る海上神幸「みあれ祭」が幕を開けた。

宗像七浦と近隣の漁船が船首に波切御幣を戴き、紅白の吹き流し、大漁旗などで満艦飾にして大島港に約四百隻の漁船が集結した。

一方、鐘崎から神湊迄の海岸線は、この勇壮な海上神幸を拝観せんものと多くの見学者で埋め尽くされ、また海上には観光船、上空には取材用ヘリコプターが飛びかった。

午前九時三十分、少々汗ばむ程の晴天の秋空のもと、出港合図である花火の号砲が打ちならされると、先導船を先頭に御座船、供奉船がエンジン音を響かせながら一斉に大島港を出港、先導船の神職がお祓いをする中、各船々首より白波を立て海上に幾重の長く白い航跡を残しつつ、大船団は大海原を所狭しと地ノ島へと先づ進路を取り、鐘崎沖で神湊港へ進路を変更「国家鎮護宗像大社」の大幟を掲げた御座船に従うように神幸をつづけた。

定刻、午前十時三十分、神湊港に入港を告げる花火が打ち上げられ金光丸、第八宮地丸の二隻の御座船が接岸した。

神湊港では沖・中両宮の御神鑒をお迎えすべく辺津宮御神鑒もすでに着御されており、養父宮司以下奉仕神職が威儀を正して御座船の到着を待っていた。

神湊港に一年ぶりに宗像三宮の御神鑒がお揃いになられた後、三女神を奉安した三台の御輿が沿道を人々が埋め尽くす中、頓宮へと参進、頓宮祭が斎行された。

頓宮祭を終え、三宮の御神鑒は御座車にて辺津宮に入御され、大祭は幕を開けた。

七五三祭の御案内

毎年十一月十五日に数え年三才の男女、五才の男児、七才の女児をつれて神社に参拝し、今日までの無事発育を感謝し、更に将来の成長を祈願するお祭りです。

昔は三才の男女は髪置、五才の男児は袴着、七才の女子は帯解きの祝いが行われていました。この我国古来の慣習を今日に伝えるのが、七五三祭りです。

当大社でも、お子様の健やかな成長と幸せをお祈りする、恒例の「七五三まつり」を、本年も左記により盛大に執り行いますので、皆様お誘い合せの上御参拝下さいます様ご案内申し上げます。

記

期　間　平成六年十一月一日～十一月十五日
（尚、この期間以外でも、おまつりは行っております。）
初穂料
一件（一人）三〇〇〇円
一名増すごとに二〇〇〇円の追加となります。
授与品　御祈願お申し込みのお子様には、お守り、千歳飴、御幣などを授与いたします。

千年の森に思ふ

世界の森はいま。森から海へ。森をつくる。森と文明など、森に関する多彩なテーマを掲げて千年の森シンポジウムが神都・伊勢で開かれた。この「千年の森に集う会」の主催する行事には神社本庁、神宮司庁、皇学館大学をはじめ全国の多くの神社・神道人が参加し、神社人として心を奮ひ立たされる多くの意見が発表されてゐた。人と自然との調和といふ大会のスローガンは神社神道の信仰の核心である。しかも開催地の伊勢こそは、昨年、両正宮の御遷宮を終へた全国神社の信仰の中核であり、神と森、人々と美しく調和して過ごす理想の姿を留めてゐる神宮のお膝元である。

○

無計画に自然を破壊して、それを消費して生きることを何とも思はぬ人々が大半であった世界が、人類の未来への危機を実感し始めた結果とはいへ、「自然を育ててそれと共存して行かう」との方向に動き始めたことをまづ第一に我々は評価したい。それとともに、この自然との共存意識が信仰の柱となってゐる神社界が、積極的参加の意識を持った。それが神社界の社会運動展開への糸口になればとの期待も持ってゐる。千年の森といふ掲げられたテーマの目指すところは、単なる一時のお祭り騒ぎではなく、極めてスケールの大きい永遠の活動を前提としてゐる。この発想が、鎮守の森を再評価し、日本の森の育成に繋がり、さらに世界の緑化運動に発展すること、そしてこのテーマと共通の思想で括られる水質汚濁、大気汚染、国土荒廃などのあらゆる自然破壊への歯止めとなってくれることを読者と共に期待しよう。

○

この運動に神社界の一部からは一現在の神社神道の危機は、鎮守の森の公共性の認識運動だけでは救はれない。森を媒体にする運動は、社会の理解を得られやすいが、それのみに集中すると、神社自身が森の中に入り込んでしまって、人々から乖離する恐れもなしとしない」といふ不安の声もある。現在の日本の神社信仰の置かれてゐる立場を見れば、その主張にも一部の説得力を感じざるを得ない。

戦後の時代五十年、それは神社本庁の歩んできた時代ともほぼ重なるが、その間、神社界は日本人の精神生活の核としての機能を十分に発揮し得ないまま歩みを重ねてしまった。日本の現在置かれてゐる国民心理の状況を見ると、長い日本の歴史の中に培はれてきた独自の民族的美風は、まるで歴史博物館の陳列ケースの中に展示されてゐるやうな形になり、人々は価値観もなく動物的本能のままにうろついてゐる現状にある。日本の神々への信仰は、必ずしも日本人の生活指針として活かされてゐない。神社の神々への信仰は神社によって多様であるが、どの神社も自然を畏れ、自然と調和しながら祀り主として皇室をいただき、営々と国土を改良し、子孫に積み重ねてきた文化の蓄積を伝へた祖先を敬慕し、心穏やかに睦みあって生きることを人の道の理想とする信仰に支へられてきた。

その美しい民族精神構造は、潜在意識としての人々の心の奥に受け継がれてゐるとはいっても、はっきりした行動規範とはなり得てゐない現状にある。今回の大会で森の重要性が再認識されても、物理的存在のみで、日本の森の独特の信仰の重みが理解されなくては、神道の将来への転機となるとは考へられぬとの声にも耳を傾けなければなるまい。

○

そのやうな説があるからこそ、我々はここで戦後五十年のいま、神社本庁の五十年、あるいはもっと大きく昭和の時代の神社界の歩みの総括を真剣におこなひ、惰性と停滞からの脱却を志さねば、時機を逸し、将来の健全な神道の発展は望めなくなるのではないかと斬界に強く訴へ続けたい。歴史を純粋に我々神道人の立場にたって客観的に回顧し、我々のいま置かれてゐる現状を確りと確認し、進むべき活動の方向を確認する座標軸を作製する。

その謙虚な作業の中に「千年の森」の計画も「神道人の行動」とともに、多くの活動方針の中の重要な柱の一つとして位置付けさせるべきであらう。千年の森の一大イベントが、成功した時点においての所感である。

（神社新報）

余滴

宗像の郡境、戸田山に源を発し、朝町川、山田川、八並川等大小十数余の支流を集めて宗像平野の中心部を流下して玄界灘に注ぐ釣り川。流路延長六・二km、流域面積五平方km、落差が極めて緩やかな二級河川である。この河川の都市計画版とも言うべき「釣り川水系河川環境管理基本計画」の策定がこの程始まった。福岡県の二級河川では、北九州市の紫川水系に続く二番目。計画の大要は三つ。治水、利水と河川の空間管理。河川はそれを取り巻く環境の変化によって時々の住民の様々な要求を併存してきた。その結果、水質の汚濁、流下水量の変化など、河川の姿容を招いている。

釣り川には、灌漑用の多くの堰が在り、四月頃から十月頃まで水は堰き止められ、堰から上流は湖沼状となり流水は淀留する。十月以降堰は倒され、川は本来の姿に戻る。このパターンが毎年繰り返される。

宗像市住民の生活処理水が日量二万tというから市郡の水道水源はこの河川の再利用なくしては考えられない。急激な人口増加による排水は、釣り川水系の浄化機能を減退させてきた。当社の夏の大祓えの奉唱歌に「宮川の清き流れに禊ぎせば千年の命延ぶるという」とあり、その昔釣り川は魚影を視る清流であった。河川敷占用規制が三十年振りに緩和される傾向なので駐車場、トイレ、ベンチ等の河川敷設置も可能となり、残る問題は釣り川の水質。これをどの様に保全管理するかが住民今後の課題であり、水を大切にする個々の心構えが益々問われてこよう。

第四〇〇回 宗像大社歌会詠草

中村吾郎選
毎月末日〆切

大島　越智　治子
潮満ちて小さき川と交り合ふ所濁巻く波の音する
（評）『濁巻く波の音』の内実が静かながら人に情感をもたらす。初めての発見でなかろうか。

大島　杉田　禮子
この夏の日々など想ひ本堂に秋の彼岸の法要を待つ
（評）本堂に秋の彼岸の法要を待つ間に浮かんだ夏の日々のこと。事は単純だが広がりを持つ。

自由ケ丘　津江富美子
湾内の貯材置場は夕暮れて外材艀多連らなりて鳴る
（評）実に歌は一言で決まる。この場合『夕暮れて』があるだけで湾に浮かべられた木材の響きが聞こえる。

田　熊　鷲頭かつ代
餅草と呼び名やさしきこの草も雑草となり繁るにまかす

福岡東　桜井　ツ子
月のなき仲秋の庭の薄明に地虫は低く切れぎれに鳴く

日の里　後藤　君代
取置きし茗荷は笊にま白なる花咲かせをり朝の厨に

赤間ケ丘　松本　澄子
潮退きし中洲に集ふ水鳥はひしめき合ひて春の日を浴む

大　島　目原　節子
唯会へる一時の幸せたしかめて老いる姉等と古里に別る

大　島　河野　英子
朝まだき宮の石段降りゆけば沢蟹素早く八方に散る

鐘　崎　安永　久子
噴き出づる汗心地よしボランティアと朝々商ふ野菜たばぬる

土　穴　瀧口　敦子
夜桜は街灯に照り美しく家路を急ぐ道の明るし

城西ケ丘　石井　陽子
霧雨に墨絵の如くかすみたり山の端おぼろ雲と見紛ふ

武　丸　中村さつき
立秋すぎ尚衰えぬこの猛暑蝉の鳴声に暑さいや増す

朝野　藤井　浩子
真夏日に鵞の鳴く林ありて郊外団地に住むもまたよし

八幡東　古賀ハツネ
猛暑に耐えて咲き充つ百日紅色鮮やかに狭庭彩る

原　町　八波　五月
眼交ひは野坡三千石の太鼓田かつて栄へし花笠田植へ

名古屋　小田　喜一
追り来る短き命を法師蝉ひねもす鳴けり秋風の中

名古屋　小田　留子
義母が継ぎわれが継ぎ来し味あれど嫁には嫁の味のあるらし

津屋崎　佐々木和彦
山頂の松の林の上をゆく細長き雲の白くかがよふ

徳　重　石松や寿子
まとまりし雨に憂のやわらぎぬ手にぎり初めし稲もみのらむ

自由ケ丘　細川　絹子
振り出しし大粒の雨地を叩き明け方の道走る人見ゆ

池　田　小田　イセ
時の流れ見しめて立てる櫨古木の空洞の幹に雨降りそそぐ

大　島　屋形ミヨ
夕立後の気温昇ればいち早く蜂うなり飛び無花果襲ふ

福　間　池浦千鶴子
す枯れたる畑にのこる鷹の爪炎暑つづきに耐へに耐へたり

吉　留　白木うめの
草ばかり旺盛な畑の草取ると屈みたる背にふと秋の風

田島放生会

いよいよ収穫の秋を迎える

「田島放生会」として郡民に親しまれる当大社秋季大祭が秋の訪れを告げると共に、十月一日より三日迄盛大かつ厳粛裡に斎行された。

今年は台風の影響が多分に心配されたが大祭前日には落ち着きを取り戻し、沖中両宮奉賛会、又地元総代並びに協力会の献身的な奉仕により、無事大祭を迎える運びとなった。

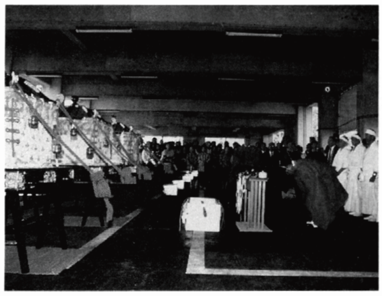
大祭前日の九月三十日、午後五時より総社地主祭、同六時より宵宮祭が斎行され、翌日からの大祭が滞り無く執行される様祈念された。

十月一日、大祭の初頭を飾る「みあれ祭」が行われ、玄海洋上に午前九時半大島を出港した四百隻に及ぶ船団が、約一時間もの勇壮なる海上神幸を行った後、神湊港へ入港した。

沖・中・辺の三宮に鎮まり坐す三女神が一同に会し、玄海魚市場での着御祭を終えると、三宮の御神璽を乗せた輦台は頓宮へと陸上を神幸、頓宮祭終了後、三台の御座車で多数の車輌に護られ日像旛月像旛のはためく辺津宮へと入御。続いて多数の参拝者が見守る中、秋季大祭第一日祭が斎行された。養父宮司により国家鎮護五穀豊穣、大漁祈願の祝詞が奏上され、地元青年団により雅びなる主基地方風俗舞が奉納された。続いて出光氏子会々長、太宰府天満宮内田祢宜を始め各界の代表者により玉串が捧げられ祭典は終了した。

翌二日、午前八時宮木貞彦氏外二名による流鏑馬が行われ、神門前に設けられた馬場を三頭の馬が疾駆し、的に対し矢が射られると多くの参拝者から歓声と盛んな拍手が贈られていた。

午前十一時秋季大祭二日祭を斎行、神社庁宗像支部長大澄光信氏による郡内神職奉幣の後、宮地嶽神社献幣使野上雅貴権祢宜、氏子会奉幣使八波高男氏（内殿）による奉幣詞奏上。続いて十二単をまとった玄海中学校女生徒四名により浦安舞が優雅に披露され、多くの参拝者がその舞姿に見入っていた。



翌三日、午前十一時総社祭斎行、福岡喜多流能楽師梅津忠弘氏外会員による翁舞が軽やかな小鼓と鋭い笛の音と共に三女神の御前に奉納された。五百年もの伝統を誇るこの翁舞は人々の足をしばしば滞め、賑わう境内に一時の静寂をもたらした。引き続き高宮、第二・第三宮秋季大祭、護国神社秋季大祭が執行された。多数の遺族会々員、県議、市町村長等が参列、浦安舞が奉納され、護国の英霊に対し敬虔なる祈りが捧げられた。

午後二時より本殿にて南坊流による献茶祭が斎行され、御神前に見事な濃茶を立て奉納された。

三日に亘り行われた「田島放生会」は爽やかな秋空の元、盛大に無事終了した。

神郡の秋祭り

織幡神社

十月一日、午後六時半より、玄海町鐘崎に鎮座する、織幡神社（宮司永島俊一氏）の秋季大祭が斎行された。

織幡神社は「鐘の岬」と呼ばれている佐屋形山々頂に鎮座し、対岸の地ノ島との間は、玄界灘と響灘との接点であり、非常に潮の流れが速く海の難所として知られている。「ちはやぶる鐘の岬を過ぎぬとも、われは忘れじ志賀のすめ神」と万葉集にもよまれている。

古来より宗像大社境外摂社として関係深く、毎年四月十六日と十月一日の大祭には、当社より幣帛が捧げられる。

この十月の秋季大祭は、織幡の神が佐屋形山頂より里に下りて来られる日である。

当日定刻、神輿に奉安された御神璽は、山麓の御旅所に着御され、神前に海川山野の神饌が供えられ、永島宮司の祝詞奏上につづき、宗像大社より幣帛供進の祝詞が奏上された。

御旅所の祭場横では、子供相撲が奉納され歓声につつまれていた。

この玄界町鐘崎は、「フグ」の水揚げ港として全国的にも有名な漁港町である。この日も、フグ漁船数隻が東シナ海の漁場へ向け出港した。

縫殿神社

津屋崎町奴山に鎮座する縫殿神社（宮司永嶋俊一氏）秋の例祭が十月五日午前十一時より斎行された。

同神社の例祭には古くから宗像大社より幣帛が供進され、本年も神職一名が出向奉幣詞を奏上した。

当日は好天に恵まれ、定刻になると奴山地区の氏子総代さん等が参集。午前十一時祭典開始。永嶋宮司祝詞奏上の後、奉幣詞奏上、続いて玉串拝礼の行われ、祭典を終了した。

祭典終了後、公民館に於て直会が盛会に催された。

この秋の例祭が終わるとこの地区でも稲刈りが始まる。

【ご案内】十一月の各種神賑行事

第二十四回 西日本菊花大会

当大社境内全域に九州・山口各県から菊愛好家が丹誠込めて作り上げた銘花三阡鉢以上を特設展示場に展示する西日本一の菊花大会です。出品は、九州山口各県対抗大輪・福助特別競技の部、大輪の部、盆栽の部、懸崖の部、特作の部の五部門に分かれて審査され、文字どおり西日本ナンバー一を決める大会です。

期　日　十一月一日～十一月二十二日迄

会　場　境内全域（展示ハウス百余棟）

表彰式　十一月十三日

—◇—◇—

第八回 宗像名刀展

今年も多くの崇敬者の方々から御協力を得て、鎌倉時代から現代までの直刀・大刀・短刀・脇差・槍等の刀剣類を展示します。

期　日　十一月一日～十一月二十三日迄

場　所　宗像大社神宝館一階

拝観料　三百円

—◇—◇—

第二十三回 奉納剣道大会

この大会は、古来よりおこなわれてきた野試合形式をとり、宗像地区の各剣道教室道場など小学生から一般迄の男女剣士七〇〇名が参加し熱戦が繰り広げられます。

期　日　十一月三日

試合開始　午前九時より

会　場　本殿横境内（雨天の場合は玄海少年自然の家）

—◇—◇—

第二十回 奉納吟剣詩舞道大会

熊本市に本部を置く、清香吟社（会長益中鵬山）社中の会員約百名が、日頃練磨した自慢の喉で、詩吟・剣舞を神前に奉納、その後清明殿に於いて詩吟剣舞大会が行われます。

期　日　十一月三日午前八時三十分より

会　場　清明殿

—◇—◇—

第二十三回 献詠短歌大会

福岡県内を始め全国の短歌同好者が、この大会を通じて、互いに交流しつつ、切磋琢磨し伝統文化の護持と文化高揚に寄与する事を目的して開催されたもので著名な斯界指導者の先生方を選者としてお招きし、講評、指導を受けると共に参加者相互による感想、批評を発表するなど、規模、質共にすぐれた大会です。

期　日　十一月十二日

開始時間　午前十時より

会　場　清明殿

—◇—◇—

第二十二回 秋季奉納盆栽展

宗像地区の盆栽愛好家で結成された、宗像大社奉納盆栽会々員の秘蔵する盆栽が出品されます。

秋の盆栽展は松などの木物を中心とした盆栽が約五〇席展示され、参拝者の目を楽しませます。

期　日　十一月十一日～十五日迄

会　場　祈願殿一・二階ロビー

観覧時間　午前九時三十分～午後五時迄

—◇—◇—

第二十一回 宗像大社本因坊戦

宗像地区のアマチュア囲碁棋士にとっては、年に一度の昇級昇段のチャンスであり、待ち望まれる大会です。

宗像郡市より百数十名の有段者が出場。本因坊戦は四段以上の強豪により本年度ナンバーワンの座をかけて熱戦が繰り広げられます。

期　日　十一月二十七日

受付時間　午前九時三十分～五十分迄

場　所　清明殿

—◇—◇—

第二十回 奉納柔道大会

宗像郡市内中学校一・二年生約七十名が出場、新人戦も兼ねて行われます。

期　日　十一月六日

会　場　玄海中学校武道場

—◇—◇—

第十五回 少林寺拳法奉納演武会

この演武会は、宗像地区の少年拳士、大学生、一般拳士百余名が参加、日頃の修練の成果を神前に奉納します。

期　日　十一月十三日

会　場　本殿横境内（雨天時中止）

一誌一話 (37)

"あま"の里玄海

樂 杏 子

"むなかた海人族"という名称は、古代の宗像（胸形）人に対する呼び名として、いま定説化してきている。また宗像と云う所は、海女（あま）の発生の地と言われている。

宗像地方一帯は、低い山に囲まれた平野部が少ない自然環境のため、海で獲れる産物を生活の糧とし、古くから海を中心とした集団社会の生活圏をつくってきている。その中でも特に宗像郡玄海町鐘崎は、"海女のふる里"としても名高く、その名は全国によく知られている。

鐘崎では海女の"素潜り漁"が今も続けられ、民俗学の上でもここが日本に於ける海女の発生地とされている。海女の素潜り漁は季節漁撈であり、アワビ・サザエなどの夏季の最盛期は、船に乗り漁場へと向かう。古くは各地の漁場を周りつづけ、短期間の船住生活をする海上民でもあったであろう。

鐘崎海女の集団が残した足跡は、北は日本海を北上して石川県能登半島輪島・舳倉島。東は瀬戸内海の各浦々。西は長崎県の壱岐・対馬・五島列島と素潜り漁を行いながら、海上で船住をし、漁期が終わると鐘崎に帰港する生活であった。後には、それら各地に定住して新しい現地人となっていくが、いまでも残る言葉や生活風俗の一端から、民俗学上の生活圏の分布範囲を知ることができる。特に石川県の輪島市や長崎県対馬の曲部落では、鐘崎から海女の集団が移住し一つの部落を作った地区として著名である。

盆踊りは無形文化財の一つである。鐘崎盆踊のなかの踊の手と足の動作、太鼓の打ち方またはやし言葉の内にも、所々に輪島や曲の作法が混雑しているという。やはり古くからの住民どうしの往来の結果であろう。

近年は盆・正月などの交流が一段と盛んになったようである。

では何時頃から潜水漁を行っていたのであろうか、弥生時代後期にあたる三世紀頃の日本を「倭」と呼び、社会・風俗・物産も記録しているのが中国の「魏志倭人伝」である。末盧（まつら）国の条に、「山海に濱うて居る。……好んで魚鰒（あわび）を捕らえ、…皆沈没して之を取る。」これは今の松浦郡。唐津市近郊である。

また「男子は大小と無く、皆黥面文身。……断髪文身、以って蛟龍の害避く。今倭の水人、好んで沈没して魚蛤を捕え、文身し亦以って大魚・水禽を厭う。」

北部九州の海岸部での生活者"漁撈民"のことを詳しく記している。これによると、大人・子供・にかかわらず顔面・四体に入れ墨をし、海に潜って魚・貝・水鳥等を獲りよく食べている。つまり、古代北部九州の潜水の方法として、全身に入れ墨をし、サメなど海獣から体を守る護身の習慣があったことが知られる。

玄海町には福岡県指定文化財として「海女の漁具一式」が保存されている。この中で頭に巻くタオルには、「星形のマーク」の縫い取りがある。これは古代社会での文身（いれずみ）が、時代と共に変化し、作業道具や着装具で身を守る方法へと移った残照である。

第十一回 宗像郡遺族会研修旅行

下田、熱海温泉と伊豆大島を訪ねて

第十一回宗像郡遺族会研修旅行「下田・熱海温泉と伊豆大島を訪ねて」が十月五日より七日迄の二泊三日の日程で、宗像郡遺族会々長広島純孝氏外三十名参加のもと行われた。

研修旅行当日午前七時、宗像各地よりバス一台にて出発。福岡空港へと向った。一行は飛行機にて名古屋へ飛び、到着後貸切りバスに乗り込み東名高速にて伊豆へ向い、途中浜名湖に立ち寄り広大な湖を背につかの間の休息をとった。再びバスを走らせ、しばらくすると富士山が姿を現し、皆、身を乗り出して富士山を眺めその姿をカメラに収めたが、あいにく曇が多く全景を見ることは出来なかったものの迫力は十分に味わうことが出来た。

伊豆半島に入って最初に浄連の滝を見学、約三十mの高さから流れ落ちる滝の勢いとは対照的にそこから流れる水は鮮やかな透明で心を和ませてくれた。

浄連の滝を後に一行は、全国的にも珍らしい二回転して降りてゆくループ橋を経由し本日の宿泊地である下田に到着。下田温泉で一日の疲れを流すこととなったが、偶然同じホテルに東映のサスペンスドラマ撮影班の一行が宿泊しており、中には東映一行と写真を撮るなど、思わぬ土産話しを持ち帰る事となった。

翌朝、一行は伊豆大島へ渡るべく稲取港までバスに揺られた。バスの中は昨晩の話しで持ちきりとなり、バスガイドも出る幕を失なわれ少々翻弄気味のうちにバスは稲取港に到着。渡船にゆられながら伊豆大島迄の一時間十分の船旅を楽しんだ。伊豆大島に到着後、観光バスに乗り島巡りを行った。このバスはワンマンバスで普通は案内テープを流し運行するのだが、一行の運転手さんは自からの饒舌を生かし案内され、バス内は笑いの絶えない楽しい観光となった。伊豆大島では三原山をはじめ大島公園、椿トンネル、郷土芸能館を訪れた。さすがに椿の名所だけあり島全体に椿が群生しておりその多さには圧巻させられた。又八年前に起った三原山の大噴火も今では陰をひそめて平静を装っていたが、島民の間には今でも感慨深いものがあると拝察される。島内観光を終え夕刻には高速船にて熱海港へもどり二日目の宿泊地である熱海温泉に到着。会食では数々の演芸が出される中、お互いに酒を酌み交わして熱海の夜を楽しんだ。

最終日翌朝、二日間の疲れも見せずたくさんの土産を両手にかかえて一行は乗車した。バスは先ず十国峠に向ったが、熱海では上着が暑いほどに感じられたのに高原の十国峠に着くとさすがに肌寒く、皆首をすくめていた。

次にバスは箱根の関所跡まで進み当時の関所の様子を再現した建物や通行手形を展示した記念館を見学。芦の湖越しの山間いから薄っすらと顔を見せた富士山がとても印象的であった。

箱根を後にしてバスは一路東名高速に乗り名古屋へ向けて走り出し、昼食を日本平で取り終えると一同静岡の最後の街並みを目に焼きつけた。休息後一行は静岡製茶工場を見学してから再び東名高速にて名古屋へと走った。

名古屋空港を夕方出発し午後七時福岡空港に到着。午後八時には全員無事に家路についた。

三日間バス、飛行機、船と色々と乗り継ぎ、お年寄りには少々きつい旅の気がしたが、一同年を感じさせない元気な旅姿であった。

交通安全キャンペーン実施

優良運転者はシートベルトの着用から

今年も秋の交通安全県民運動が九月二十一日より三十日迄行われた。

当社でも、宗像警察署、宗像交通安全協会、宗像地区の市町村と協力し、二十七日に宗像市三郎丸に於て神職一名巫女三名が出向し、交通安全キャンペーンを行った。

今年の秋の交通安全運動のキャッチフレーズとして「ゆずりあい、思いやり、みんなでつくる交通安全」を掲げ、高齢者の交通事故防止とシートベルトの着用徹底を運動の重点にキャンペーンを展開、ドライバー等に安全運動を呼びかけた。

当日、午後一時より旧国道三号線沿いに設けられたセーフティステーションで、宗像警察署員、交通安全協会職員、初めて参加した水産高校の生徒等と一緒に、一台一台、車を止め、シートベルト着用の指導や安全運転を呼びかけるチラシに乳酸飲料と当大社のお守り、ステッカーを配布、「安全運転をお願いします」とドライバー等一人一人に訴えた。

通行中の運転者たちは、警察官に止められ、最初は交通違反の取締と思い、不安気であったが、当社の巫女から「おつかれさまです、安全運転でおねがいします」とお守りを手渡されるとホッとした表情を見せていた。

今回のキャンペーンでもまだまだシートベルトの着用を忘れている方が多かった様であるが、万一の事故時の被害軽減の上でも、シートベルト着用を習慣づけて、安全運転に心がけてほしい。

「神郡宗像薪能」

採火式斎行

十月十一日午前十一時より、宗像大社に於て、十二日に行われる「神郡宗像薪能」に際し、薪能のかがり火となる「採火式」が斎行された。

「神郡宗像薪能」は、宗像市郡住民の文化振興と交流促進を目的として企画されたもので、十二日夜六時から、鎮国寺境内で、約四千の観客席を設け、観世流家元の観世清和師や、人間国宝の野村万作師らが出演し、「羽衣」や「清水」が披露される。

祭典は神職二名奉仕の下、早川信孝実行委員長他関係者約二十名が参列し厳そかに執り行われた。斎主祝詞奏上の後、「火きり神事」があり、神職が神前に供えられた火きり具を撤下し、拝殿所定の座に於て古式ゆかしく奉仕した。火が起るまでには多少の時間がかかったものの、無事忌火が起こり、忌火はランプに移し替えられた。

その後、

「火きり神事」

祭主の玉串拝礼続いて早川実行委員長の玉串拝礼が行われ、明日の薪能が無事斎行されるよう祈念し神事は滞りなく終了した。

又薪能の会場である鎮国寺でも、舞台設営等を行い、明日に備えた。

大島村消防団

全国大会で健闘

「自動車の部」で五位入賞

先月号にて既報の大島村消防団が、十月十三日(木)横浜市で各県の優勝チームが出場して開催された、全国消防操法大会で活躍、見事五位に入賞。

同消防団の出場する「自動車の部」には二十三チームが出場、競技は標的に向け実際に放水し（第一線五十五秒、第二線六十五秒の基準タイム）、消火活動を完了すると共に、その行動は迅速且つ的確であることという厳しい基準で優劣が競われた。

大会に臨んだ同消防団の選手たち（河野幸一・吉田賢二・田志稚加由・豊福正一・中村勇）は、応援に駆け付けた小山県議、杉田村長を始め宗像地区並びに同消防団役員、出場選手家族、村内有志などが見守る中、失敗は許されないたった一度きりの競技を行った。

選手達は緊迫した雰囲気の中で、約半年間に及び血の出るような、日頃の猛訓練の成果を遺憾なく発揮、緊張した表情ながらも、的確に操法を行い、第一線五十四秒三〇、第二線六十四秒〇四のタイムで、九州ではトップ、全国でも第五位という素晴らしい成績を収めた。

大会を終えて選手達は、「福岡県の代表として、恥ずかしくないようにと一生懸命頑張りました。優勝は叶いませんでしたが、五位入賞出来たのも応援して頂いた皆様のおかげです」と感謝の気持ちを表していた。

言葉では言い表わせないハンディを背負いながら、立派な成績を収めた、大島消防団の健闘と活躍に大きな拍手を送りたい。

社務日誌抄

九月一日　月次祭
　宗像平和タクシー㈱代表取締役塩川弘昭氏来社
九月五日　水三島紙工㈱九州支店長門司浩氏他一名新任挨拶の件にて来社
　宗像市史編纂室正木東海大学教授他四名来社
九月七日　NTTテレコムエンジニアリング一五〇名参加
九月八日　出光興産㈱千葉海上輸送協力会十四名参拝
　宗像大社秋季大祭打ち合せ四者会談
九月十日　沖津宮神璽迎え日立笠戸エンジニアリング一七〇名参拝
九月十一日　宗像大社菊花会理事会
九月十三日　宗像郡遺族会役員会
九月十四日　NTTテレコム一五〇名参拝
　大韓民国総領事禹鐘淏氏来社神宝館拝観
九月十五日　月次祭
九月十七日　立成佼成会小倉教会中島淑江教会長花堂雅一渉外部長参拝
九月十九日　香川県大野原八幡神社宮司柘植宗尚氏、同氏子総代連会々長藤川宜正氏他三五名参拝
　宗像記者クラブ秋季大祭外報道説明会
九月二十日　宗像大社氏子会総代総会
九月二十一日　玄海町戦没者慰霊祭於宗像護国神社
九月二十三日　皇霊殿遥拝式
　城山興産㈱福岡営業所城山に登ろう会四〇名参拝、南坊流二代目洗心庵瀧口宗芳氏来社
九月二十四日　㈱パワメイト第一事業部長七澤佑輔氏参拝
九月二十五日　佐世保史談会三九名来社神宝館拝観
九月二十六日　田島老人クラブ清掃奉仕
九月二十七日　出光興産㈱東京支店副支店長谷口尚治氏、同福岡支店新燃料課長山近正美氏参拝
　宗像警察署交通安全キャンペーン神職一名、巫女三名出向於宗像市
　出光興産㈱福岡支店総務課宮口氏他一名献茶祭の件にて来社
　文化庁建造物課江面調査官拝殿屋根状況調査の件にて来社
　㈱武田運輸商会代表取締役社長武田弘氏他一名参拝
　玄海町消防団秋季大祭警備打ち合せ会
九月二十九日　地元総代並協会秋季大祭諸準奉仕
九月三十日　天皇皇后両陛下御渡欧行幸啓安泰祈願祭
　秋季大祭総社地主祭・宵宮祭
　福岡教育大学庶務課長松本次好氏来社

宗像大社歌会 俳句作品集（三七九）

福間　森　清

鼻の日といふポスターや今朝の秋

藤沢　井上　玄洋

昼顔の垣根彩る終の花

日の里　花田いつ枝

掬る鏡に上る小望月

福間　二宮　末子

石佛にがんじがらめのつたかずら

自由ケ丘　細川　絹子

新涼となりてうごきの軽さかな

福岡中央　力丸　玄風

山荘に心足り得て虫しぐれ

若松　高橋　忠實

五百年歴史のこして故里は萱

若松　井手　清隆

一行の古文字の読めぬ秋思かな

ひかりケ丘　南　萬里

渡御のあと波ひとつなき玄界灘

（続）海の寄物 91

いしいただし

雨に見放された梅雨、そのまま猛暑に突入、雨を運ぶ台風にもさけられ、異常な夏となった。が、今もそれが続いている。

八月末、神戸へ行った。

現在の明石海岸

神戸貿易促進センターでグアテマラ展があっており、福岡市在住の写真家・鈴木弘仁さんの写真も展示されるということで、それを見たい気もあったのと、明石の「明石原人発見地」を訪ねてみたいと以前から思っていたからである。

鈴木さんは福岡市西区西浦に住まわれ、時折、イルカや漂着物の写真を送っていただくし、幾度か中南米や沖縄の写真を見せてもらっているからである。

会場は期待していたほど広くはなく、小じんまりとしたもので、そこの壁面にカラーで二五点ほど鈴木さんの写真が掲げられていた。グアテマラは中央アメリカの北西部で、面積は日本の本州の約半分、人口は九七八万人、国名のグアテマラは、クアウテメラン（森の多い土地）に由来しているという。マヤ文明の影響を受け遺跡も多いようである。

そこを出て神戸市立博物館へ行った。博物館は昭和一〇年（一九三五）建築の旧東京銀行神戸支店ビルを転用したもので、正面入口にドーリア様式の円柱が並ぶ。やや採光と天井が低いが、博物館用に建てられたものではないから仕方がない。

特別展は鎖国・長崎貿易の華（ギヤマン、更紗、金唐革）が開催されていた。各地から多くの資料が集められ内容的には重厚なものになっていた。

常設展示は当然旧石器時代からはじまるが、期待していた明石原人については語られていなかった。陽の目を見なかったが、日本の旧石器を語るとき、問題を投げかけた記念すべき「明石原人」この館だけでも取りあげるべきだと思うのだが。

弥生・古墳関係の遺物は近畿文化圏であり、結構見るべきものがある。この博物館のメインは、昭和三九年（一九六四）に神戸市桜ケ丘遺跡から発見された銅鐸一四個と銅戈七本で、一括して国宝に指定されている。

それに明治期の神戸港と周辺の外国人居留地関係のものがある。また館のコレクションには池長孟の収集した約四五〇〇点の資料が中心になっておりなかでも、南蛮屏風、泰西王侯騎馬図、ザビエル像は美術書や教科書でもおなじみである。他に古地図のコレクションは南波松太郎のものが中心である。他にギャラリーは神戸ゆかりの芸術家たちの作品を展示し、また学習室は「見るコーナー」「触るコーナー」「考えるコーナー」が設けられ、体験して知識を身に着けることができる。これはどの館も最近は多く行われている。図書室もある。約三時間かけて見学。

明石原人発見の地、西八木海岸（現中八木）も歩かなくてはならない。三宮から山陽電鉄に乗り、快速や特急に乗り継ぎ、中八木で下車、ホームの案内板に「明石原人発掘地」南〇・三キロメートルとある。

昭和初期の明石西八木海岸

「いいぞ〇・三キロメートルとは近い」とわくわくしてきた。

駅の南前方に人家があり、その後方に明石の海が広がっている、海岸へ出た。海蝕によって切り立った断崖がつづき、丁度、屏風をたてめぐらしたような景観で「屏風が浦」というのは納得できる。それにそって幅三メートルほどの道が続いている。護岸の下は砂浜になっているが砂利や瓦が小さく砕けていて、あまり美しい浜とは言えない。発掘を記念する碑らしいものもない。

八月末は、泳ぐ人もまばらでだれも通っていない。しばらく周囲をさがしていると、自転車に乗った人が通りかかった。

故郷の神宝 (10)

岩上における祭祀 17号遺跡

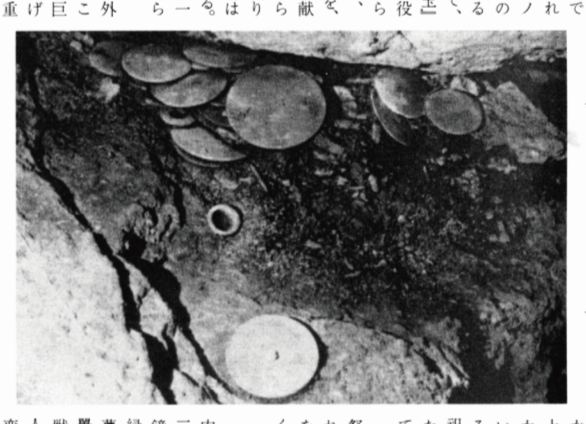
沖ノ島は巨岩を型作ってきた石英斑岩が、隆起して島を造成してきた。これらの岩々は地形変動の際に炸裂し落下して、島では一番広い谷間の平坦地にあたるこの地に停まり、直立する巨岩群を形成している。この巨岩群地が祭場であり、現在祭祀遺跡群と言われている所である。

巨岩群の中で岩の上に作られた祭場が、沖ノ島祭祀の最古の時期に属する「岩上祭祀」で、「鏡・刀剣・玉」が奉献品の主役である。それら祭場の中でも、青銅の漢式鏡を、一番多くの奉献品として供えられ、祭りが執り行われた祭場は17号遺跡である。ここには二十一面の鏡が献えられていた。

17号遺跡の外様を観る。ここでは三個体の巨岩が、積み上げられたように重なっている。17号遺跡が一番下部であるが、岩が自然に棚状の形に張り出してきている様に見える。この棚が奉献品が並べ供えられた所であり、祭りの場である。

遺跡そのものが祭場というよりも、祭祀の時に献える品々を置く、祭壇としての役割で用いられたことであろう。いわゆる、今日云う祭りの道具、祭具として使用されている"案"の役目を果たしていたことが、強く感じられる。

この棚状の岩の上を祭壇として、奉献品の品々の下には小石を敷き詰め平らにし、供え物が横に平坦に並べられるように配置されていた。たぶん、祭りの斎員は岩下に並び、丁度、岩の下から案上に供えられた品々、奉献品を見上げる様な形で祭祀が斎行されたのであろう。



祭壇までの高さは、谷間の平坦地から一六・七mの所である。この遺跡の岩は長さ七m、幅四m、厚さ三mあり、岩上部は約一・五m平方の平坦面である。これが棚状祭壇であるが、奥に向って傾斜している。この為斜行している祭壇面には、石英斑岩の偏平に剥げた平石を敷き並べて、壇上を平らにしているのである。

この祭壇の上には二十一面からなる鏡が供えられていたが、狭い所に鏡の表面が上を、つまり空を向き、積み重ねるがごとくに並べられ、その間々に、横列の様な状態で石釧、車輪石、ガラス玉類、勾玉、管玉、刀剣類と奉献品が山積された様な状況であった。

特に17号遺跡の祭祀奉献品は、鏡・刀剣・玉の三種からなり、岩上の祭祀のなかでも一番古い時期にあたる。ここの祭祀も安定まったく使用されていない。

ここで17号祭祀に奉献されていた品々を列記していく。

一、鏡（十一面）

内行花文鏡　三。方格規矩鏡　七。三角縁神獣鏡　三。

雙鳳鏡　一。

雛龍鏡　二。

獣帯鏡　二。

人物画像鏡　一。

変形文鏡　一。

二、武器

鉄刀・鉄剣類

三、装身具

勾玉（碧玉・滑石製）、管玉（碧玉・滑石製）、小玉（ガラス・滑石製）、滑石製車輪石、石釧・鉄製釧

四、工具

蕨手刀子

〈松〉

宗像むかしばなし 瑠璃碗異聞

昭和二十九年より、昭和三十年まで、四回にわたる宗像神社沖ノ島祭祀遺跡の調査は神社の由緒を解明すると共に吾国古代文化の優秀性を世界に語って、余りあるものがあった。

その第一回、第二回調査に於て、調査団は、八号遺跡と称している遺跡区分の中央小岩より、淡緑色を帯び、気泡がかなり見受けられる一片のガラスを発見した。種々研究の結果、これは型ガラス技法による碗の一部である事が判明し、本邦古墳時代に出土例の稀有なこの発見に調査団は驚喜した。

葱嶺（パミール山脈）の中に「石の塔」と呼ばれるところがある。ここは、東方の隊商と西方の隊商がお互いの物資を交易する所として、古くより知られていた。

ペルシャ、ササン王朝の頃、この「石の塔」で東の隊商が持ち帰った瑠璃碗はどその後の東洋を喜ばしたものはなかろう。西の隊商の話によれば、これは王家の出目の品と言う。駱駝の背に積まれたこの瑠璃碗は路を東へ東へとたどった。葱嶺を過ぎ流沙（タクラマカン砂漠）へ幾日も砂風が続いた。隊商はその間駱駝と共に伏して、ただ嵐の過ぎ去るのを神に祈った。太陽が橙色に現われ、それが黄色の空気を吹き払うと、隊商の群は再び動き始めた。気が遠くなるほど暑い日が何日も続いた。飲料水が欠乏し始めた頃、流沙も元り、シルクロードへと道をとった。

絹がこの街道を通って西欧にもたらされたように西方からも種々の珍稀なものがこれを通って東洋にもたらされた。

途中刀好をさけて一行は敦煌に到着した。中国西域のこの小国家には、漢帝国より西域長史という地位の高い役人が派遣されていた。隊商の一行は役人の前に相応の贈り物をし、亦異邦の珍宝を披露した。その時、この役人の目が瑠璃碗をとらえた。瞬間彼は今まで見たことの無い新しい技法のこの器を買いとる決心をした。一日も早く故国に帰りたい彼の憶いが、この淡い緑色のガラスのきらめきに、ふと柳色を想い越させたのかもしれない。隊商は交換の品として、役人の横には

べる金色の髪をした碧眼の女人をのぞんだ。女は、化粧こそしていないが、薄い青銅でつくった指輪をはめ、碧玉の首飾りをかけ、青玉の耳環によって、美しく飾られていた。この商談は成立し、瑠璃碗は役人の手に納まった。この器により、役人の胡地における生活はどのくらい慰められたか判らなかった。ある日には、故里の緑の河辺を偲び、またある日には青緑の衣を羽織った妻や子供等の上を想った。かくすること数年、北に往く雁と共に帰還の令書が彼の下にもたらされた。帰りなん、いざ！　数十頭の駱駝は荷物を満載してゆらりと立ち上った。瑠璃碗もまた再び東を指して進んだ。万里の長城を眺め、玉門関を過ぎると、景色は柔いだものとなった。役人が夢にまで描いたように、空は紺青に晴れ、道の両側には植えられた白楊や樫柳の木の梢を吹く風は爽やかであった。旅すること数旬の後、都へ到着した。西の城門より街衝に歩をうつすと、一行はただならぬ気配に驚いた。道の両側には旌旗が林立し、儀杖兵が整然と立ちならび、歓迎の鼓は百雷の落つるが如く鳴り響いた。その旗の間から遠に望めば、東西にのびる。街道の中央に白く輝く鳳輦が望見される。